

## イスラエルの映画保存

今年建都3000年を迎えたエルサレムは、あらゆる建物の外壁を古くから用いられている国内産の同じ石で覆うことを条例で義務づけているが、ダビデの塔などがある旧市街にほど近い立地のイスラエル・フィルム・アーカイブ/エルサレム・シネマテークの建物もまた、穏やかな薄いペーージュの石造りの外観で人々を迎え入れる。

名が体を表わすように、この「アーカイブ/シネマテーク」はアンリ・ラングロワの影響を色濃く受けたりア・ヴァン・リアの創立によるエルサレム市民のシネクラブ的上映施設として出発し、多くの映画ファンを集めている(言わずもがなだが、彼女は故川喜多かこ夫人をととても敬愛している)。観客は若者が多く、大小2つの上映ホールの年間入場者数は約15万というから、人口の大きさから見て、非常に人気が高いシネマテークであることは明らかである(もともと日本で言えば大劇場やミニシアターで商業公開されるような作品も多数番組に含まれているので単純な比較は成り立たないが)。7月には毎年この場所でエルサレム国際映画祭も開催され10日間で150本以上の作品が集中的に上映されている。



モルデカイ・ナヴォン監督特集のカタログ

一方、FIAF会員としての「イスラエル・フィルム・アーカイブ」は、科学芸術省やエルサレム市の財政支援によって運営される映画保存機関としても十分に機能している。'94年に発表された資料<sup>註1</sup>によれば、自国映画遺産の残存率(この場合はアーカイブが保存管理下に置いているフィルムの全自国映画作品数に対する割合)は、長篇劇映画で約90%と、日本に比べれば羨ましいほどに高い。しかも一昨年からは、イスラエル政府の公的保存機関(national repository)指定を受け、国の助成金で作られた

映画については自動的にアーカイブにデポジットされるという、いわゆる部分的法定納付制度がスタートしたために、集まってくるフィルムの量はどんどん増えている。ただし、「長篇劇映画で約90%の残存率」とはいても、その実数は645本であり、ということは歴史上イスラエルでは720本前後の劇映画が作られたことになるから、映画生産大国に必要な映画保存に比べれば、この国のそれは劇映画に限って言えば、かなり小規模で済むことにはなる。記録映画の重要性に関する認知は国全体の歴史意識の高さに比例して他の国よりもはるかに進んでいると思われるが、それでもその残存率が約55%であるようにさまざまな困難がつきまとっているようだ。

映画の収集にあたっては、イスラエルで製作されたすべてのフィルムを対象とするのみならず、ユダヤ民族に関する映像なら世界中どこで作られたものであっても入手し保存することにしているのが特徴的である。つまり、イズラエリとジューイッシュという2種類の映像遺産に責任を持つという考え方である(国内で配給された外国映画も保管している)。民族のアイデンティティや国家の「歴史的連続性」を主張し強化するためにフィルムが果たす役割はきわめて重要との考えから、こうした積極的なアクイジション・ポリシーを敷いて、建国以前(pre-state Israel)の映像の収集、戦前・戦中に海外のゲットーに暮らしたユダヤ系市民の映像が残されている国の調査、ナチス時代に撮影されたフッテージの探索などを盛んに行なっている。

これに対して、過去数年にわたって特にロシア、東欧のFIAF会員アーカイブがかなり



FIAF総会公式プログラム・リーフレット



エルサレム映画祭の絵葉書

の関係フィルムを提供した(アメリカでも失われていたヤコフ・ベン・ドフ監督の1920年代の作品が発見され、同アーカイブの手により保存・復元されている)。実際に、本総会期間中にも、リュミエール兄弟商会の撮影隊が記録した1896年のエルサレムの風景、ナチスがゲットーを破壊し物運び出す様子を写したニューズリールなど貴重なフィルムが上映された。同アーカイブが発表した最新の資料<sup>註2</sup>によれば、1995年末でコレクションは、プリント20,000本、ネガ50,000缶、ビデオテープ14,000本を数えるにいたった。1948年の独立宣言から数えて半世紀に満たない人口550万の国の人々がこれだけのアーカイブを運営していることには敬服せざるを得ないだろう。

なお、エルサレムには、アメリカのスピルバーグ監督が個人的に出資しているもう一つの映画保存機関、「スティーヴン・スピルバーグ・ジューイッシュ・フィルム・アーカイブ」(マリリン・クーリック所長)があって、こちらも(実際、競うように)きわめて熱心に独自の映画保存を行なっている。そのコレクションの一部は、例えば最近も「イスラエル以前のイスラエル」というプログラムとなって第14回ボルデノーネ無声映画祭で上映され好評を博した。(H.O.)

註1: Penelope Houston, *Keepers of the Frame* (London: British Film Institute, 1994), p.169.

註2: 同アーカイブ/シネマテークのニューズレター/カレンダー1996年4月号による。